

一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

ふえーぬかじ

南ぬ風

2016.7~9

Vol. 40
夏号

これからも地域と共にある財団で

——美ら島財団設立以来、本部町には大変お世話になっております。

まずは、40周年おめでとうございます。思い返せば、1975年7月から翌年1月まで開催された沖縄国際海洋博覧会では、終了後の跡地をどうするかという問題がありました。地元本部町では、国営公園として整備してほしいと国や県に要請しました。

国営公園として整備され、海洋博覧会記念公園管理財団が1976年7月に発足して以来、理事長をはじめ職員のみなさんのがんばりで、国内でも有数の亜熱帯の動植物に触れられる公園になりました。皆さんの運営管理ノウハウや技術は、高く評価されていると思います。また、首里城公園では文化財収集なども行われている。幅広い分野での研究成果は、研究論文という目に見える形にするだけでなく、地域への貢献という形で還元されています。私はこれは素晴らしいことだと思いますよ。

——ありがとうございます。

今後も、美ら島財団は地域あつての機関だという、今のいい形をぜひ維持していただきたい。くり返しますが、美ら島財団の



今年で38回を迎えた本部八重岳桜まつり。

存在意義は研究のためだけではありません。本部町に限らず、沖縄本島北部全体、ひいては沖縄県全体の観光に貢献しているし、今後もそうあつてほしい。本部町としても財団に協力や参画ができることは何か、本部町のために一緒に何ができるか、美ら島財団には何を頼ることができるかをしっかり考えて、お互いにWIN-WIN（ウィンウィン）の関係でいきたいですね。

——美ら島財団と本部町の協力体制には、強固な結束力がありますね。

今年で43回を迎える本部海洋祭りや本部八重岳桜まつりなど、一体となつて協力していただいています。海洋博公園で行われるサマーフェスティバルやトリムマラソンなどのイベントは、町の活性化にも貢献してもらっている。本部町長は美ら島財団の理事でもありますので、町としても一体感があるんですよ。人間というのは、友達になつてやつていこうという気持ちがないと、どうも表面的な関係になつてしまつてうまくいかないものです。その点、美ら島財団の皆さんは地域に飛び込んで、一緒になつてやろうという気持ちがありますから、これはありがたいことですよ。

——地元として、さらに美ら島財団に期待されることは何ですか？

観光客の皆さんは海洋博公園に行くだけでなく、レンタカーでカフェやそば屋を回ったりされるので、その波及効果は大きい。実は本部町は1975年の海洋博当時に比べると、17800人いた人口が2005年には14500人に減少しています。もし公園や美ら島財団がなかったら、もっと過疎化が進んでいたかもしれない。

町として美ら島財団に期待するのは、地域活性化のために今後も協力していただきたいということです。美ら島財団の事業規模が大

きくなると、本部町の産業振興への効果は絶大だと思います。その直接効果も重要ですが、滞在型になつてニーズが多様化している観光客への対策として、例えば本部町の自然や動植物についての研修をしていただくとか。先日、美ら島財団の専門職員を講師に招いてホテルウオッチングの勉強会が開催されました。そういう形で我々地元も勉強会を通して自然を学び、その知識で観光客の皆さんに喜んでいただき、それも活性化につながるという、いい循環をつくりたい。海洋博公園を中心に、地域を振興していければと思います。

美ら島財団は、県や国が出資した財団、言わばみんなの財団です。さらに50周年、60周年に向けて、多様なニーズに合った研究をしていたきたい。開園して約30年になる熱帯ドリームセンターなど、いずれは必要になるであろう整備についても、受け身ではなくて、美ら島財団側からも提案していくことも考えてほしいですね。海洋博公園と美ら島財団は、地域の宝です。これからも地域と共にあつてほしい。

高良文雄

TAKARA FUMIO

文＝いのうえちず

沖縄が本土に復帰した1972年に県庁入り。企業局次長、自治研修所長などを歴任し、2006年に退職、同年の町長選で初当選し、現在3期目。沖縄県町村会では会長を務める。1948年、本部町生まれ。法政大学卒。

「沖縄美ら島財団は本部町に限らず、北部地域、沖縄県全体に貢献していると思う」

前号に引き続き、設立40周年記念の特別企画として、沖縄美ら島財団（以下、美ら島財団）と深く関わりのある組織の長にインタビューを実施。美ら島財団のこれからに期待することなどをお聞きした。

海洋博公園のある本部町は、美ら島財団の設立当初からずっと連携してきた自治体だ。1975年の沖縄国際海洋博覧会終了後の跡地利用について、地元から国営公園として整備してほしいという要請を国や県に行ってきたという経緯もあるそんな、古いおつきあい。の高良本部町長に、40年のあゆみをふりかえっていただき、本部町から今後の美ら島財団に期待することなどをお聞きした。

contents

40周年記念特別インタビュー……	02
調査研究……	06
普及啓発……	08
御城物語……	09
沖縄の大木……	09
運営管理……	10
スポットライトの向こう側……	12
財団いんふお……	14
編集後記……	15
おもろさうしの植物……	裏表紙



作品タイトル「一碧」
経糸のみ括り染めしてから織る、経緋という技法。海と空の境目がないような、人によっては青にも緑にも見えるグラデーションで、沖縄の海や気候を表現した。大学卒業時は自分のイメージを作品にうつす力が足りず、大学院では納得できる作品を作れたかったと語る。

沖縄県立芸術大学大学院 造形芸術研究科 工芸専修
尾崎 みどりさん（東京都出身）

39号から42号までの1年間は、沖縄県立芸術大学・大学院造形芸術研究科「第27回卒業・修了作品展」にて受賞した4作品が表紙を飾ります。残り41号・42号も学生の瑞々しい作品をお楽しみに！

誌名「南ぬ風（ふえーぬかじ）」とは…
南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育てられてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思っています。

北中城村長賞

美ら島財団が培ったノウハウに期待



世界最大級 旅の祭典「ツーリズム EXPO ジャパン」 ©OCVB

—OCVBの会長は美ら島財団の評議員でもあり、美ら島財団の理事長はOCVBの理事でもあると二つの組織には密接なつながりがあります。県外や海外での沖縄観光のプロモーション事業をはじめ、協力体制のもとで連携して動くことも多いですね。

東京銀座ソニービルで開催されるソニアクアリウムでの14トン水槽設置はインパクトがあつて、毎年楽しみに来るリピーターも多いイベントです。東京ビッグサイトで開催されたツーリズムEXPOジャパンでも沖縄ブースの真ん中に水槽を置いてもらいました。他にも新宿エイサーなど、沖縄観光をPRする場に美ら島財団は欠かせません。海洋博公園は北部観光の目玉で、昨年度の実績でも入園者数が約460万人、沖縄美ら海水族館への入館者数は約340万人でしたね。

—沖縄へ来る観光客数が年間約794万人ですから、実に多くの方にご来園いただいています。

沖縄観光における海洋博公園と沖縄美ら海水族館の役割は大きいですよ。海洋博公園には「自然と共存する」という哲学を感じますし、飽きさせない工夫もすばらしい。公園のオープンから40年経つても、お客さんが来続けるというのはすごいことです。ドバイやシンガポールにも大きな水族館があるそうで、関係者が美ら島財団のノウハウを買いに来ました。地域の漁協とも連携しながら、外へ向かって技術売っていく。私はここに大いに期待したい。製造業が弱いと言われる沖縄で、外に売れる技術は誇りになると思います。私は長く経営者だったから、水族館に行っても、つい「いらっしやいませ」を言う側の視点で見る。水槽の裏側が見えてくるから、運営する側の大変さもよくわかります。

—高く評価していただきありがとうございます。それだけに、美ら島財団への期待も大きいんですね。

水族館だけではありません。熱帯ドリームセンターを中心にした植物の専門家スタッフ、首里城を中心にした歴史文化の専門家スタッフ：美ら島財団は、専門的な人材の集まりとしても魅力がある。この40年で培った運営管理と人材育成のノウハウは、沖縄の大きな財産になると思いますよ。

—沖縄美ら島財団総合研究センターには研究機関としての役割と同時に、研究成果を地域に還元するという命題があります。また設立40周年を機に、海洋博公園や首里城公園の魅力をこれまで以上に発信していけるよう、現場のスタッフも決意を新たにしているところですよ。

私は沖縄美ら海水族館には、MICE会場としての役割も期待していますよ。夜の水族館という幻想的な雰囲気の中でパーティができるというのは、大きなインセンティブになります。首里城公園もMICEで活用できるようにになると、より大きな魅力になりますね。県外では文化財に指定されて

いる神社仏閣でもイベントが行われています。琉球には独自の歴史文化がありますから、首里城公園がMICEに活用できれば、他のどこにもない異空間になっていくと思う。それと、今年度から美ら島財団が沖縄県立博物館・美術館の指定管理者になりましたね。美ら島財団には、首里城と博物館、水族館を結ぶルートづくりをやってもいいはずだと期待しています。観光客が沖縄の奥深さを体験できる場として、この三施設の連携がもたらすものは大きい。

—熱いメッセージをありがとうございます。他に美ら島財団に期待されていることはありますか？

本島南部東海岸の与那原町に4万平米のMICE会場ができます。その近くに、花をテーマにした施設があるといいですね。花も沖縄観光の魅力あるコンテンツの一つです。琉球開闢神話の舞台である久高島が目の前に見えますから、歴史や自然をキーワードにしても面白いかもしれない。MICEで来たお客様が、会議の合間にほっと和める場があるといいですね。

平良朝敬

TAIRA CHOKKEI

文＝いのうえちず

1976年有限会社ホテルなほ（現株式会社かりゆし）入社、2010年6月株式会社かりゆし代表取締役会長、かりゆしグループCEOに就任。一般財団法人日本ホテル協会本部理事、一般財団法人日本ホテル協会沖縄支部支部長、一般財団法人沖縄県ホテル協会会長などを歴任。2015年より現職。1954年、具志川市（現うるま市）生まれ。

「沖縄美ら島財団は、沖縄の大きな財産になっていく」

特別インタビュー二人目は、一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー（以下OCVB）の平良朝敬会長。OCVBは、県外で行われる沖縄の観光プロモーションなどさまざまな分野で、美ら島財団と協働体制にある。「美ら島財団は沖縄の財産になる」と語る平良朝敬会長がイメージする美ら島財団の未来像とは。美ら島財団のこれからに期待することなどをお聞きした。

かけがえのない沖縄の植物を守りぬくー総合研究センターの新たな取り組みー

農地の転用、耕作放棄や転作の影響も相まって、沖縄の水田面積は過去40年で6割以上減少しました。また、人里の植物の多くは帰化植物に置き換わってしまいました。沖縄の里地・里山の生物多様性は静かに、そして、急速に劣化しつつあります。総合研究センターでは、かけがえのない沖縄の植物を守りぬくため、これまで行ってきた調査・研究・保全事業に加えて、今年度から次のような新たな取り組みを国や県と連携しながら展開していきます。

1. 超低温でタネを永久保存する新技術を開発します！

絶滅危惧植物は自生地で保全することが基本です。しかし、極端に個体数を減らした種類は環境変化の影響を受けやすく、野外で保全するだけでは不十分です。そこで、作物や園芸植物で開発された技術を応用して種類毎に適切な保存・生育条件を解明し、絶滅危惧植物の種子や茎頂を超低温で永久保存する新技術を開発します。併せて種子バンクを整備します。なお、本研究で得たノウハウは、島野菜や花きの優良品種の系統保存にも活用します。

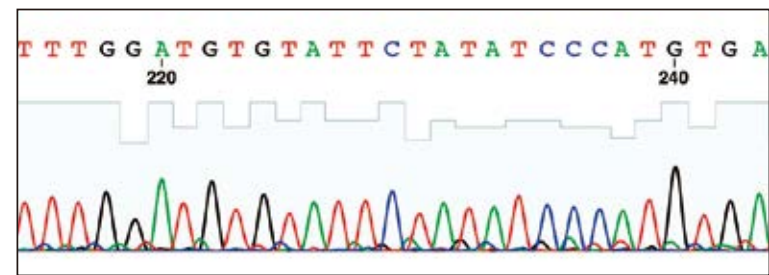
2. 沖縄産の野生植物・有用植物全種のDNAデータベースを構築します！

今後5か年をかけて沖縄産野生・有用植物全種のDNAデータベースを構築します。この取り組みにより、識別が困難な幼植物や葉片でも正確に種名を調べることができるようになります。また、野生植物では隠ぺい種（外部形態では区別できないが



液体窒素によるタネの保存(左)と3年後に発芽した絶滅危惧植物ミズマツバのタネ(右)

生物学的に別種と判断されるもの)や種内変異の存在を明らかにすることが出来ます。有用植物では優良品種の選抜、新品種登録に係る時間や経費の節減が期待されます。



DNAシーケンサーで解析した未知のキク科植物の塩基配列(nDNA・ITS領域の一部)
(塩基配列を調べた結果、この植物は新種であることが判明)

3. 国際水準の植物標本庫（ハーバリウム）を整備します！

現在、沖縄の主要な植物標本庫は琉球大学にある2か所のみです。保存リスクを減らす観点からは、複数の研究機関に分散収蔵すること



沖縄美ら島財団総合研究センターの植物標本庫

標本棚

植物標本

行い、標本データベースの構築も進めます。

4. 里地・里山の絶滅危惧植物の保全を加速します！

沖縄の絶滅危惧植物の約1割は水田の植物です。この割合は本土の2〜3倍と高く、水田面積が激減する中、沖縄の水田の植物は内地よりも深刻な状況におかれています。水田の植物は絶滅危惧種であっても対象となり、保全対策が講じられることはありません。また、現状不明や未知の植物も多く存在します。そこで、今後2か年で沖縄全域の水田



水田における植物相調査の様子

5. 「西表島植物誌」を編纂します！

西表島では世界自然遺産登録に向けてほぼ全島が国立公園化されるなど、生物多様性保全に向けた取り組みは進展しつつあります。しかし、西表島において証拠標本に基づいた植物誌（フロラ）は作成されていません。近年、台湾や中国の植物誌が改訂され、名前をつけ直さないといけない種類もあります。そこで、琉球大学、国立科学博物館などと連携して標本データの収集や現地調査を進め、「西表島植物誌」を編纂します。

（赤井賢成）



本島中部の水田地帯で見つかった未知の植物(サクラソウ科ハイハマボスに近縁と考えられる)



広大な西表島のマングローブ林

地の利を活かした体験プログラム



野外炊飯の様子



火おこし体験



テント設営の様子

沖縄県立名護青少年の家は、1966年に設立された県立第1号の青少年教育施設で、平成25年4月より沖縄美ら島財団が指定管理しています。施設は名護岳（345m）の中腹に位置し、沖縄県指定天然記念物のコノハチヨウ、フタオチヨウ、イボイモリなどの貴重な生き物が生息する豊かな自然の中にあります。県内小中高校のオリエンテーションや交流会、スポーツ合宿などに多く利用していただいております。大自然を生かした登山やナイトハイキング、ホテル観察などの体験プログラムも多数行っています。

数ある体験プログラムの中から人気の高い「キャンプ」及び「自然観察会」を紹介します。

【キャンプ】最も人気の高いキャンプは、初心者向けの技術習得、自然観察、家族交流を目的とし、火おこし体験、野外炊飯、テント設営・宿泊、自然観察等のプログラムを季節を感じられる内容を盛り込んで実施しています。道具の使い方

や片づけ方、かまどの作り方、火の扱い方、動植物の名前や特徴、安全対策などを丁寧に解説し、参加者のスキルアップを図ります。

【自然観察会】動植物（ウミガメ、マンブローブ等）、名護岳登山、星空観察などのテーマを設け、当財団や外部の専門家を講師として招き、自然の不思議や美しさを体感するプログラムを実施しています。フィールドで専門家による解説を行ったうえで、名護青少年の家に戻ってまとめ学習・発表等を行い、参加者からは「ヤンバルを知る良いきっかけになりました」等、自然についての理解を深めることにつながっています。

他にも、文化交流イベント、健康増進イベント、地域連携イベント、ボランティア養成講座等を実施しています。名護青少年の家では、これからも「みんなが使えるわったー（私たちの）施設」として、活動が続けていきます。

（高 英昭）



やんばるの生態を学ぼう



干潟の観察



ウミガメの観察

御城物語

うぐしくものがたり

Vol.12

かつて、首里の人々が「御城（うぐしく）」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関係するトリビアを語る歴史エッセイ。

首里城を飾る瓦～龍頭棟飾～

首里城正殿の唐破風正面と屋根瓦の両端に大きな龍の棟飾が取り付けられています。これは、龍頭棟飾といい、首里王府の史書である「球陽」によると1682年の正殿修理の際に平田典通という人物が五彩の釉薬の材料を全島に探し求め、焼物で作った正殿に飾ったと記されています。平田典通は、それまで琉球では出来なかつた釉薬を使用して焼く方法を中国で学び、次々と焼物の歴史に残る功績を上げた琉球の名工でした。この釉薬を使った焼物技法は、現在では「上焼」と呼ばれ、平田典通の弟子たちによって伝え受け継がれていったと考えられています。

当初、「上焼」と同じ技法で製作された龍頭棟飾は、その後修理を繰り返すうちに、少しずつ変化し、古写真に残っている正殿の龍頭棟飾は、漆喰で作られました。現在復元されている龍頭棟飾は、漆喰で製作されていた頃の規模や形態を踏襲しながらも、かつての正殿を飾った焼物で作られました。3メートルにもなる巨大な造形物は、正殿の守り神として今も屋根に鎮座しています。正殿の屋根瓦には、琉球王国の名工の技術が使われていた事に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。（幸喜 淳）



首里城正殿



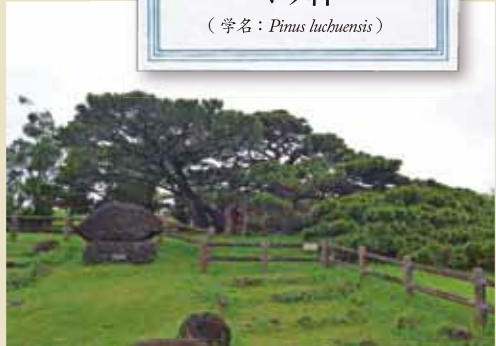
首里城正殿 棟飾



首里城正殿 棟飾正面

Vol.32

＜和名＞
リュウキュウマツ
＜科名＞
マツ科
（学名：Pinus lucuensis）



久米島町の五枝の松（全体像）



沖縄の

大木

リュウキュウマツはマツ科マツ属で琉球列島固有の常緑針葉樹です。耐風性・耐潮性に優れ、海岸の防風林、街路樹や公園などの緑化木などにも利用されており、昭和47年には沖縄の県木に指定されています。

リュウキュウマツは本来まっすぐに伸び、高いものでは樹高15mを越えます。しかし久米島の「五枝の松」は、樹高約6mで根元から大きく枝分かれし、たくましい幹が四方に伸びた独特の樹形をしており、覆う面積は300㎡以上と広大です。この樹はなだらかな開けた斜面地に生えており、入り組んだ枝が地表を覆う姿からは力強い生命力が感じられ、まるで暖かく大地を包み込んでいるようにも見えます。

今ある五枝の松は、この地方の地頭職を代々務めた上江洲氏の「家記」によると、1839年（道光19年）に植えられた2代目の樹です。初代は1700年代（18世紀）の初期に、農業の神様である土帝君を祭るために植えられました。久米島博物館の学芸員によると、名前の詳細な由来は不明とのことですが、もしかしたら初代の枝数は5本だったのかもしれない。

五枝の松は、地元の人々の信仰の対象として大切に保存され、また独特な美しい樹形から国の天然記念物に指定されており、多くの人が訪れます。これからも久米島のシンボルツリーとして、生命力にあふれる姿を私達に見せ続けてくれることでしょう。

（田代 亜紀羅）

目の前は太平洋、 背後にはやんばるの山々 抜群の環境が自慢



嘉陽小学校の校舎をそのまま生かした美ら島自然学校。校庭は地域の方々がグラウンドゴルフを楽しむ場となっている

名護市東海岸の嘉陽^{かよう}小学校の跡地に、2015年7月沖縄美ら島財団総合研究センターの調査研究・普及啓発の拠点として、美ら島自然学校がオープンした。

「調査研究はもちろん、嘉陽・安部地区の地域振興や活性化につながる普及啓発をやっていくのも目的の一つです」

と語るのは、美ら島自然学校を担当する小野英彦副参事。

学校の目の前には時おりウミガメが産卵のために上陸するという自然のままの浜が広がる。実は嘉陽小学校と沖縄美ら島財団には深い交流があった。きっかけは、小学校からの依頼で沖縄美ら海水族館スタッフがウミガメの卵を保護し、ふ化させた際、児童と共に放流会を行ったこと。それ以降、水族館スタッフは講師役として何度も嘉陽小を訪れ、ウミガメ学習会を重ねた結果、嘉陽小の子どもたちはウミガメを保護・飼育するまでになった。また、子どもたちが学習成果を発表する発表会には、嘉陽の住民が総出で参加。嘉陽は言わば「ウミガメの郷」となっていたのだ。

そんな経緯から、美ら島自然学校では、校舎の脇にウミガメの調査研

究を行うための飼育施設を建築中。飼育を通じた環境学習での利用も検討している。環境への負荷を極力減らすため、週に2回、近くの汀間から海水を運び、水槽の水は循環る過させる予定だ。

「ウミガメなどの調査をはじめ、地域の伝統文化に関する調査や研究拠点としても学生さんや外部の研究者の方に気軽に利用してもらえばと思います。美ら島自然学校を利用する方に、嘉陽の売店でモノを買ってもらえば、地域経済への貢献にもなる。また、調査研究のために若い人が来ることは、地域の活性化にもつながります。観光客向けの集落散策プログラムや、遊休農地の活用なども視野に入れて、地域に根ざした活動展開をしていきたいと考えています」

現在、一般向けには、学習会、美ら海・美ら島自然教室、工作教室などを開催。学習会は周辺環境を生かした「海の環境シリーズ」が好評だ。「ウミガメのなぞ」「イノリの生物さがし」「漂着物ってなに？」などのタイトルで、昨年度は7月～3月までの9カ月間で、のべ309名が参加。さまざまな年齢層の人が集まるといふ。



- ①美ら島自然学校の目の前にある天然の浜
- ②ゆったりとした時間が流れる嘉陽の集落
- ③かつて嘉陽小学校の子どもたちが描いた海の生き物の壁画は透明な塗料で保護（人物は小野英彦副参事）
- ④教室Bでは図書の閲覧や無料クラフト体験が可能
- ⑤研究者や大学生も使える実験室
- ⑥漂着物の学習会で実際に拾った漂着物など、学習成果も展示
- ⑦学習会「ウミガメのなぞ」では、ウミガメはどのように産卵するのか、実際に砂浜に出るの学習も
- ⑧学習会でウミガメの生態について熱心に学ぶ参加者
- ⑨2016年5月現在建築中のウミガメ飼育施設
- ⑩ぐにやりと歪んだかのような地層が見事な「名護市嘉陽層の褶曲（しゅうきよく）」この地層は国の天然記念物に指定されており、地学の学習に最適な地形



さらに特徴的なのは、地域の小学校と連携で約330名の児童が沖縄の動植物や環境を学習した。また、幼稚園から高校までの学習プログラムも用意。大学関係者や研究者が調査研究できる実験室や研究室、休憩室も備えている。無料でクラフト体験や図書の閲覧などができる部屋もあり、近隣の人たちはもちろん、ふらりと立ち寄った観光客も遊びながら学べる場となっている。昨年度は7月から3月までの間に約3100名が美ら島自然学校を利用した。

嘉陽は、やんばる東海岸の玄関口にあたる地域。自然学校のスタッフが近隣環境を調査したところ、集落から徒歩圏内に、豊かな里山の自然が残っていることがわかった。美ら島自然学校から徒歩数分の距離にある用水路やあぜ道で、貴重な植物や虫に出会えるのだ。小野副参事はこう語る。

「嘉陽小学校の後身にあたる緑風学園では、美ら島自然学校を活用した学習をしています。北部の中学校とも広く連携して、地域の自然を学ぶことに加え、地域の課題を見つけて解決できる人材の育成につなげていきたいですね」

沖縄周辺の海に生息する魚たちが見られる沖縄美ら海水族館。その魚たちの多くを供給しているのが読谷村漁業協同組合（以下、読谷漁協）だ。

沖縄を訪れる観光客の約4割が立ち寄る沖縄美ら海水族館を支えるということは、沖縄の基幹産業である観光業に貢献しているということでもある。水族館の、言わばバックステージでどのようなことが行われているのか、金城組合長に聞いてみた。

「ジンベエザメにナンヨウマンタ、水族館のスター選手たちは、なんと読谷出身なんですわね。」

金城「ジンベエ、マンタ、エイ関係は読谷出身ですよ。他の魚でも、例えばグルクマーなんかはほとんど読谷。うちの漁協からの出向社員である魚たちがどうしてるか気になるので、僕らも時々水族館へ様子を見に行きます(笑)」

「魚はどのようにして提供されて

読谷村漁業協同組合
代表理事組合長

金城 肇 きんじょう はじめ



いるのですか？

金城「定置網にかかったものを提供しています。読谷村の比謝川沖に、タテ360メートル、ヨコ60メートル、深さ40メートルほどの巨大な定置網を設置しているんですよ。魚は網など障害物にぶつかったら、その壁沿いに沖へ向かう習性があります。その習性を利用して、定置網から40メートルほ

るパートナーだと思います」

「頼もしいパートナーですね。金城組合長から沖縄美ら島財団に期待されることは何ですか？」

金城「今、読谷で揚がった魚は陸送しています。でも、魚にとって陸送はリスクが大きい。活魚車で運んでも、サメやマグロなど泳ぎ続けないと酸欠になる魚もいます。海上輸送で本部まで持つて行けたらベストなんですが…」

「海上輸送ですか。」

金城「海上輸送は、沖縄美ら海水族館で開発された海上輸送コンテナに魚を入れ、コンテナごと船で引く張つて本部町まで運びます。魚が泳ぐのと同じ速度で運べば、魚のストレスも少ない」

「これまで水族館で見られなかった魚が展示できるようになりますね」

金城「これが可能になったら、生きたまま水族館へ運べる魚も増えて、世界初の飼育とか、もっと狙えるんじゃないかと思えますよ。読谷で獲れる魚は種類も豊富ですからね。定置網を設置している比謝川の沖は、海水と川の水が混じってプランクトンが発生しやすい。それを狙って小魚が集まり、小魚を食べる大型魚も集まるという食



中の魚を傷つけないように定置網を少しずつ絞る様子

ど、誘導壁になる網が延びています。そこにぶつかった魚が沖へ向かうと、定置網の、僕らはグラウンドと呼んでいるんですが、最初の部屋に入ります。そこでまた、壁沿いにぐるぐる回遊している間に、二番目の部屋に入り込んでしまふ。第二室からグラウンドへは戻れないよう逆流防止弁のような形になっているので、そこでまた回遊しているうちに、第三室へ入り込む。第三室の深さは20メートルで、最初に入るグラウンドの半分の深さしかありません。その第三室の網を揚げて魚をとります」

「その一部が水族館へ運ばれる。」

金城「年間2000日網を揚げるとすると、そのうち1000日は、沖縄美ら海水族館のスタッフも1名から3名ぐらい船に同乗しています。水族館スタッフはタモ（魚をすくうための棒のついた手持ち網）を持つて、完全に水から揚がる直前の網の中から好きなのを選んで持つて行きます」

「その時水族館で必要なものが得られるとは、ありがたいですね。」

金城「自然が相手なので、何がどれだけとれるかは、季節や天候、潮に左右されます。大潮の時は潮が早

いのであまり入らないんですが、小潮で落ち着いた状態だと入りやすい。最盛期は夏で、毎日約1トンの水揚げがあります」

「どんな種類の魚がとれますか？」

金城「多いのはヤマトミジュン（イワシの仲間）で年間約11トン、ガチュン（和名Ⅱメアジ）は5〜6トン、タマン（和名Ⅱハマフエフキ、タイの仲間）は約3トン、すべて沖縄県内で消費されます。揚げてみないと何が入っているかわかりませんが、大物の有無は引き揚げ始めから20分ぐらいで、だいたいわかります。」

今年に入ってから4カ月の間だけ



読谷村の比謝川沖にある巨大な定置網



定置網にジンベエザメ

物連鎖があります」

「自然のままの海の環境を守るには、陸の環境も大切なんですわね。読谷村は護岸がなく、自然の海岸線が守られていますよね。」

金城「比謝川は一時生活排水がひどかったんですが、今は改善されて水質も良くなりました。これは水族館とは直接関係ないかもしれないが、読谷は護岸がない、というところは、海に親しみやすい環境だと言えます。よく、沖縄の子どもは泳げない子が多いと言いますよね。『海は危ないから行くな』ではなくて、子どものうちから海に親しむことは、自然を守るという面でも、魚離れを防ぐという意味で

も大切です」

「海に親しむ教育は重要ですね。」

金城「読谷漁協では、海の食育にも力を入れています。子どもたちに魚のさばき方を教えたりして、『自分で料理した魚はおいしい』と思うことで魚離れを防ぎたい。定置網では海人体験もできますし、もっと多くの人に沖縄の海に親しんでもらって、自然を守ることの大切さを知ってもらえたらいいですね。来年にはセリ市場とレストランの複合施設もオープンします。水族館で魚を見たら、読谷のおいしい魚もたくさん食べてほしいですね(笑)」

文Ⅱいのうえちず

体感植物温室スーパーファームと やんばるダイニング「美ら島キッチン」が新たにオープン！

当財団が管理運営するなごアグリパーク内

名護市が農業の6次産業化支援を目的に、平成24年度より整備を進めている「なごアグリパーク」では植物温室とレストランが2016年4月27日(水)にオープンしました。同施設は、2014年6月に加工支援施設(加工研究室及びインキュベーターA、B)、2015年4月に「アグリシヨップしまちゅら」と、今回のオープンにより、6次産業化支援施設として増々充実が図られています。当財団は当初より指定管理者として、「健康」「美容」「長寿」をテーマに「なごアグリパーク」を運営しています。

今回は、オープンした体感植物温室スーパーファームとレストラン「やんばるダイニング 美ら島キッチン」を紹介します。体感温室スーパーファームは、スーパーマーケット(小売店)のように気軽に入ることができ、これまでの農園を「超える」という意味をこめて「スーパーファーム」という名前になりました。3棟の温室で構成され、観る、買う、



エントランス・フラワーボール

やんばるダイニング
美ら島キッチン

栽培状況

体感温室スーパーファーム

体験のスペースがあり、フォトスポットや植物の苗、観葉植物、園芸資材を購入できるほか、園芸教室、工作教室なども開催します。また、地域の農家と連携し、沖縄の伝統的農産物・島野菜を普及します。

レストラン「やんばるダイニング 美ら島キッチン」は、メニューとして、沖縄の真っ直ぐな太陽の光を浴び、ミネラル豊富な海風に育まれた島野菜や葉草15種を8種のタレでお召し上がりいただく「島野菜・葉草しゃぶしゃぶ」とスーパーファームで栽培した「イマドレサラダ」を中心にランチ全50種、ディナー全55種類取り放題のバイキングメニューで安心安全な食を提供します。なお、レストランの運営は当財団関連会社の(株)沖縄美ら島フードサービスが行っています。

たくさんのお客様をお迎えする用意が整いましたので、是非ご来店下さい。

設立40周年事業のご紹介

「沖縄の宝(自然と歴史文化と人)を未来へ」

前号、今号の特集記事でお知らせしたとおり、当財団は7月16日に設立40周年を迎えます。これを機会に平成28年度は様々な設立40周年事業を実施しております。

これまで当財団は、県民(地域住民)や当財団が管理する施設に訪れる国内外のお客様等に支えられ、地域や社会からの期待に応えられるよう「環境問題への対応」「産業振興への寄与」「公園管理技術の向上」に関する事業に取り組んで参りました。

設立40周年事業では、多くの方々に感謝し、これからは沖縄の自然・歴史・文化等、魅力あふれる「美ら島の輝き」を多くの人々へ届け続けるため、次世代人材育成支援事業や西表島植物誌の編纂など取り組んで参ります。なお既に、国際交流の新たな取り組みとして「ベトナムの管理職育成研修」や、歴史文化の保全として「首里城建築物の漆塗装に関するシンポジウム」などを実施しました。

これからは地域と共に、沖縄の自然・歴史文化の保全や、将来を担う人材育成に貢献してまいります。



ベトナムの管理職育成研修



首里城建築物の漆塗装に関するシンポジウム

「目からウロコ」の生物実験展 今年の夏は、ジッケン、タイケン、大ハッケン!

当財団が管理運営する沖縄県立博物館・美術館

夏の企画展

この展示会では、過去に現在の様々な生物の実験を紹介することで、来場者の皆様が、科学における実験・観察の重要性や科学の発展の歴史は実験・観察とともにあることを実感できることを目的としました。夏休みの自由研究の題材やひらめきがちりばめられていますので、ご家族みなさまで楽しんでいただけます。

実験はわからないことに対して仮説を立てて検証するためのものであり、大切なのは自分のわからないことを明らかにするために工夫することです。実験を組み立て結果に向き合うことそのものが、自然科学の面白いところであり、醍醐味なのです。そのため実験には「失敗」はありません。想定していた仮説とまったく違った結果が出てしまっても、一見失敗したように見える時こそが、新たな発見へのチャンスなのです。

この展示では過去の実験によってわかってきた様々なことを見て触れて体験することができます。小さな生き物をどうしたら観察できるのか、生き物はどのように成長していくのかなど、当時の人々の「わからない」や「知りたい」を想像しながら見学しては



いかがでしょうか。そして、新しい自分のアイデアを加えてみましょう。さあ、この夏、さまざまな実験に取り組んでみてはいかがですか!

- 期 間：2016年7月16日(土)～8月28日(日) ● 場 所：沖縄県立博物館・美術館
- 入場料：一般 1,200(1,000)円、高校・大学生 900(740)円、小・中学生 400(300)円
- ※()内は前売りおよび20人以上の団体料金、本展覧会の観覧券で博物館常設展もご覧いただけます。

第38回海洋博公園花火大会

海洋博公園開園40周年記念 感謝を込めて花火4,000発増

海洋博公園花火大会は1979年の「第1回アクアポリス花火大会」の開催から、今年で第38回目を迎え、沖縄の夏の一大イベントとして定着するまでに成長しました。

また今年は「海洋博公園開園40周年」の節目であり、「40年目の夏ー感謝を込めて打ち上げます」をテーマに、これまでにこ来園いただいた皆様への感謝の気持ちを込め、過去、県内最大級であった打上花火10,000発から4,000発増やした14,000発を打ち上げます。そのほか、音楽とシンクロしたストーリー性のある打上花火などを予定しており、よりお客様に楽しんでいただけるような大会になるよう努めています。今後も、地域団体や関係者の皆様にご協力いただき連携を取りながら、さらなる発展に向けて取り組んでまいります。



海洋博公園花火大会

新常勤役員紹介

平成28年6月16日の評議員会及び理事会において、理事長と常務理事が選定されましたのでお知らせします。

【理事長】
花城 良廣

再任



1977年3月、千葉大学大学院を卒業したのち、同年4月、(財)海洋博覧会記念公園管理財団に入社。2009年4月、常務理事に就任。2014年6月、財団プロパーとして初の理事長に就任。

【常務理事】
川満 誠一

再任



1984年3月、琉球大学法文学部法政学科を卒業したのち、1984年4月、沖縄県庁に入庁。2015年4月、常務理事に就任。

【常務理事】
後藤 和夫

新任



1980年東京大学卒業。建設省、経済企画庁、内閣府、内閣官房などで勤務。2014年7月、財団に入社し、総合研究センター長。2016年6月、常務理事に就任。

後記

今号は、設立40周年特別企画としてOCVB平良会長や本部町高良町長のインタビューを行いました。インタビューを通して、当財団に対する熱い想いを改めて感じました。設立40周年の節目の年にあたり、より充実した誌面にしていきたいと思います。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

(編集事務局 T-1)

おもろさうしの

植物

其の五

琉球王国第4代尚清王代に首里王府によって編纂された歌謡集「おもろさうし」に登場する植物の紹介コーナー。
※ 海洋博公園内におもろ植物園で見ることが出来ます。

「むぎや」

(オオムギ)

一 守り合い 君

君にしやが いそこ

波つり寄せ つり合わちへ

(中略)

又 津口の潮の

いふちへ 上がて来れば

又 新むぎやが

おろむぎやが 穂花

(後略)

「第九巻五〇五」

おもろ名
和名 オオムギ
科名 イネ科
方言名 ウフムジ



一口メモ

西アジアに広く分布し栽培種は主産地のヨーロッパをはじめ日本、アメリカ、カナダ、チリで生産されている。茎は中空で直立し、高さメートル程になる。葉はコムギより短く幅広く硬い。栽培種は小穂の並び方で縦に6列に並び六条大麦と2列に並び二条大麦に分けられる。日本では一般に六条大麦をオオムギと呼ぶ。

「解説」

守り合い神女がお祈りをします。

神女様が守護する船の船ばたに、打ち寄せる波を引き寄せ、引き合わせて

穏やかにして、(中略) 港口の潮が海岸の砂浜に上がってくるさまは、新麦、

おろ麦の穂が勢いよく出てくるようだ。「守り合い君」は、守り合う神女、

村の神女。「君にしや」は神女様。「にしや」は接尾敬称辞。「いそこ」は船のこと。大きな船や兵船。

「つり寄せつり合わちへ」は、引き寄せ、引き合わせて。穏やかにしての意。「いふちへ」は、海岸の砂浜。「あらむぎや おろむぎや」は、穂の出初めの麦。

このオオムギは、村の神女たちが、海を穏やかにして海幸を祈っているオオムギである。その中で麦の穂の出初めの勢いのいいさまは、港口の潮が勢いよく砂浜に上がってくるようだ、と謡っている。

※ 出典:「おもろさうしの植物」 発行:(財)海洋博覧会記念公園管理財団(現・(一財)沖縄美ら島財団)

沖縄美ら島財団



沖縄美ら島財団
総合研究センター



海洋博公園



首里城公園



美ら島
自然学校



当財団では、これまでに蓄積してきたノウハウを活かし、普及啓発、環境保全、地域貢献等の活動に取り組んでいます。

美らなる島の輝きを御万人へ

沖縄美ら水族館



沖縄県立
名護青少年の家



なご
アグリパーク



沖縄県立博物館・
美術館



一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌

季刊誌 南風 夏号 vol.40 2016.7~9

企画・編集・発行

みなさまに設立40周年
一般財団法人
沖縄美ら島財団
Okinawa Churashima Foundation

制作・印刷/株式会社 東洋企画印刷 〒901-0306 沖縄県糸満市西崎町4-21-5 TEL.098-995-4444

2016年7月発行

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888
TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

ISSN 2189-4140